

令和5年度 北海道小学校長会地区活性化支援事業【実践事例レポート】

- 1 報 告 地 区：上川地区
- 2 事例報告学校名：幌加内町立朱鞠内小学校
- 3 報告者職・氏名：校長 山 田 顕 次
- 4 キーワード：へき地・小規模校の地域・学校間連携

1 はじめに

朱鞠内は、幌加内町の北部地区に位置し、周囲は豊かな自然に囲まれている地域である。近くには日本最大の人造湖として名高い朱鞠内湖があり、夏にはキャンプや釣りをを楽しむ観光客が往来する。ただし、校区全体（朱鞠内・添牛内・母子里）は80戸程度の小さな集落であり、高齢者の割合が多く、本校も児童数が徐々に減少している。今年度は通常学級2、特別支援学級1の3学級編制で、全校児童が5名となった。町内中心部への移動は30kmを優に超え、その距離が様々な教育活動の障壁とされてきた。しかしながら、へき地・小規模であっても子どもに生きる力を育むことは学校としての責務であり、そのためには、小規模の強みを生かすことや地域や学校間の連携が必須である。

2 学校経営～地域とつながる

本年度、重点教育目標を「共に未知に挑む子の育成」と定め、子どもの主体的な学習やメタ認知能力の獲得を柱に据えている。全児童について個別の指導計画を作成し、学級経営案の具体的方策として、定期的に全教員で子どもの成長と今後の課題を情報共有している。主体的に学ぶ子どもを育むため、研修のみならず、日々の情報交換を通じて教員が資質向上に努め、指導の在り方を工夫している。

R5年度の重点教育目標「共に未知に挑む子の育成」

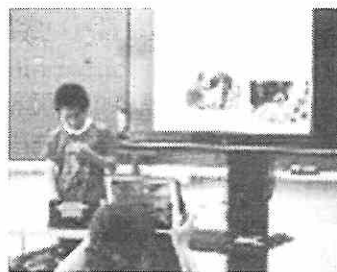
◆指導の重点とする資質能力

- ①学びに向かう力の育成～知的好奇心が持続する主体的な学習
- ②メタ認知能力・適応的学習能力～自身の学習を調整
- ③持続可能な社会の形成～地域社会や地球環境との共生と課題解決

また、朱鞠内や幌加内町に誇りと愛着をもつ子どもの育成にも力を入れている。その実現のために、教育課程を毎年見直して改善を図っている。特に、総合的な学習の時間で扱うふるさと学習と他教科を横断的に構成することで、これら重点の達成に努めている。

3 学校間の連携～ICTの有効活用

幌加内町では学校段階間連携委員会を組織し、保・小・中・高のスムーズな接続と町が一体となった学校教育を充実させることを目標としている。その中では、小・小連携の柱としてICT機器が整備された令和3年度より、幌加内小学校との遠隔授業を行っている。これまでも同学年の合同社会見学や合同修学旅行などで共に学ぶことはあったが、時間の制約で十分な交流を重ねることが難しかった。ハード面の整備が進むことで遠隔授業が可能になり、学校段階間連携委員会のICT部会が中心になって、実践に向けて動き出すことになった。



本校には児童1名の学級もあり、幌加内小学校と連携することで協働的な学びを進めることができるようになった。具体的には、同学年の児童同士をつないで合同修学旅行のグループワークを行ったり、長期休業明けに自由研究の発表交流を行ったりしている。相手意識や目的意識をもった発表の仕方を工夫し、ロイロノートの活用で双方向の情報発信をするなど、有意義な学習につなげている。継続して取り組むことで、子どもたちはタブレットの操作に慣れ、自分自身で適切にソフトを活用しながら、主体的に学習を進めるようになってきた。

今後も、教育課程や指導計画を共有しながら、遠隔による合同授業の機会を増やすことで、子どもの学びの深化、充実に努めていきたい。

4 地域との連携 ～ ふるさとへの愛着

(1) わんぱくの森



自然豊かな幌加内町は周囲に森林が広がり、本校裏の「わんぱくの森」でもその環境を生かし森林環境教育を行っている。森林管理署職員の協力の下、子どもの興味・関心や課題に合わせて年4回実施している。活動プログラムは事前に職員と打ち合わせ、植樹や巣箱かけ、野鳥の鳴き声、昆虫の生態などを実際に観察し、生態などを教えていただいた。季節による動植物の変化や樹木の成長などを詳細に聞くと同時に、森林管理署の仕事について知ることもでき、森の保全や管理などの重要性について認識を深めることができた。学習したことが他教科の自然に関わる内容につながったり、職業体験としての位置付けがあったり、朱鞠内っ子ならではの意義深い学習となっている。

(2) 朱鞠内湖の体験活動

朱鞠内湖の管理をしているNPO法人の職員は多くが朱鞠内在住であり、普段の生活でも地域や学校と深く関わっている。朱鞠内湖ではワカサギ、川エビ、幻の魚として知られるイトウなどが生息しており、子どもたちは年間数回湖に訪れて、それらの生態や保全に努める活動などから自然について学び、考える貴重な機会となっている。



特にイトウについては採卵場を見学し、道総研のさけます・内水面水産試験場の職員も同席の中、イトウの管理や産卵・受精の様子などを見学した。また、イトウの生態や保全活動での疑問などを直接質問するなど、興味をもって意欲的に活動する姿が見られた。総合的な学習の時間であるとともに、理科の生態系や環境問題、社会の環境保護に関わる人々などの学習につながる貴重な体験となっている。

(3) 老人クラブとの交流



子どもたちは生活や総合的な学習の時間、各教科で調べたことや学んだことをまとめているが、発表の機会が限定的であった。そこで、地域の老人クラブと連携し、調べたことをまとめて発表し、地域との関わりを学ぶことで、世代を超えた交流を行っている。幌加内町の主たる産業であるそばの栽培について発表を行ったり、みんなで一緒に楽しめる遊びを考えたり、教えてもらったりなど、老人クラブの方々と触れ合う学習を行った。自分たちが準備したことを発表する中で、

昔のそば栽培との違いをお話ししていただいたり、遊び方のコツを教えていただいたりと、子どもたちが想定していた以上の反応があり、多くの人々と関わることで、様々な知見を得られるという貴重な体験となった。

5 おわりに

上記での活動の他にも、幌加内高校の生徒を講師にそば打ち体験学習、近隣の小規模多機能型居宅介護をはじめとした交流施設による高齢者や幼児との交流、近隣地区合同の運動会など、地域に根差した活動を教育課程に位置付け、人々が集まる場所としての学校を推進してきた。互いが連携することで、地域と深く関わり、様々な教育活動を通じて子どもたちは主体的に学ぶことができた。また、交流の成果を蓄積することで、学びがつながり、深まりのあるものになった。今後も小規模化は避けられないが、学校外の関係機関や教育資源を有効活用することで自らの学びの成果を交流し、豊かな人間性を育む基盤として地域とともに歩む学校でありたい。